



初級講座を終えるにあたって

三 村 衛 (みむら まもる)

講座小委員会 前委員長

1. はじめに

平成20年10月号から12回シリーズで地盤工学会誌・講座の新企画として1年間にわたって掲載されてきた「初級講座」が、本号の「地すべり」をもって終了することになった。初級講座は、地盤工学会の若手技術者と学生を主たる読者対象とした読み物を掲載しようという趣旨で企画されたものであり、どのような内容を、どなたに執筆していただくのが適当であるのかについて講座小委員会内部で議論を重ねた。とにかく初の企画であり、従来の執筆方針にとらわれずに内容を考えようとしたが、当然のことながらイメージーションを必要とする作業が求められたことと、加えて事務局の指示にしたがって動けば形ができるという従来のスタイルに慣れていたこともあって、編集作業に手戻りが生じるなど、担当していただいた委員の皆さんにはかなりの負担をおかけすることになった。委員各位に知恵を絞っていただいた結果、今回の初級講座で採用したような「1回読み切りで、学校で習得する内容が実務にどのようにつながっているのか」という点に主眼を置いたものを実施することになり、各号のテーマと執筆者を選定した。物事をわかりやすく説明するためには、本質の正しい理解と関連する豊富な知見が求められるため、結果として執筆陣はそれぞれの実分野の大御所と呼ばれる先生方に落ち着いた。

2. 初級講座の評価

掲載した初級講座の内容を表1に示す。地盤工学の広範な領域をカバーするという目的はある程度達成されているが、テーマをよく見ると、液状化、沈下、地すべりといった現象を表すもの、擁壁、杭という構造物を表すもの、締固めという工法を表すものというように、切り口が必ずしも統一的ではなかったという批判は甘受しなければならない。ただ、こうした企画における不備を執筆者の力量によってカバーしていただいた結果、読者モニターによる評価は非常に高く、事後総括させていただくとすれば、初級講座は成功のうちに終了したと考えている。主たる対象と想定した読者層以外の熟年層からも、「立場上、聞きにくいことが今回の初級講座で理解できた」、「学校で習った理論や式の意味とその実問題への適用の仕方が理解できた」といった好意的な意見を

数多くいただき、今後もこのような企画を続けてほしいという読者の多数意志を感じた。したがって、講座小委員会としては、今後も初級講座を継続的に掲載することとし、併せて通常講座の内容をさらに「読みやすさ」に力点をおいたものにすべく、編集委員一同意思統一をして活動を進めていきたい。

表1 初級講座の掲載実績

掲載号	タイトル	執筆者 (敬称略)
第1回	平成20年10月号	初級講座を始めるにあたって ヒービング・ボイリング・盤膨れ-地下掘削工事での掘削底面破壊現象-
		三村 衛 (講座小委員長)
		西垣 誠 (岡山大学) 高坂信章 (清水建設)
第2回	11月号	液状化 (その1)
第3回	12月号	液状化 (その2)
第4回	平成21年1月号	杭基礎のトラブル事例から学ぶ (その1: 杭基礎の選定と設計方法)
		菅野高弘 (港湾空港研) 菅野高弘 (港湾空港研)
第5回	2月号	杭基礎のトラブル事例から学ぶ (その2: トラブル事例の紹介と原因・対策)
第6回	3月号	沈下
第7回	4月号	盛土
第8回	5月号	擁壁
第9回	6月号	締固め
第10回	7月号	豪雨による斜面災害
第11回	8月号	地震による斜面災害
第12回	9月号	地すべり
		釜井俊孝 (京都大学)
		初級講座を終えるにあたって 三村 衛 (講座小委員長)

3. おわりに

初級講座という新しい企画に取り組んだことで、改めて学会誌に求められているものを認識することができた。次の半期間は通常講座を掲載するが、読者モニターや各方面からのヒアリングの結果を受けて、平成22年度上半期は「数値解析」をテーマとした初級講座を掲載することになっている。今や一部の専門家だけでなく、広く一般に使われるようになった数値解析であるが、じっくり腰を据えて理論の枠組みから実践までを手を動かすことも含めた内容で執筆していただく予定なので、若手技術者、学生の方々はもちろん、ベテラン技術者の皆さんも復習の意味をこめてお読みいただければと考えている。ご期待を。